

座長： 越塩 俊介

2.4 粗放連続培養の実際・・・桑田 博

独立行政法人 水産総合研究センター 栽培漁業部 技術開発調整官

粗放連続培養法によって従来培養が不安定であった L 型ワムシを水温 10～30℃までの範囲で自在に培養できるようになった。培養日数も最大220日となっている。考え方と現場で実施する際に注意すべきことを説明する。

2.5 ワムシの品質について・・・小磯 雅彦

独立行政法人 水産総合研究センター

能登島栽培漁業センター 主任技術開発官

ワムシの品質が培養方法によって変化することと、その変化が種苗生産成績に及ぼす影響について説明する。

2.6 ワムシの培養に役立つ微小藻類・・・岡内 正典

独立行政法人 水産総合研究センター養殖研究所

生産技術部育種研究グループ グループ長

ワムシの培養はクロレラを中心に行われることになったが、補助的な利用により、魚類種苗生産に役立つ微細藻類がある。その増殖特性と効果的培養方法について述べたい。

2・1 ワムシの生物学（長崎大学大学院生産科学研究科 萩原篤志）

海産ツボワムシ類 *Brachionus plicatilis* complex は約 2000 種が知られている輪形動物門の中でも最も進んだ研究が行われてきたグループである。その大きな理由として、飼育が容易で、魚介類幼生にとって摂餌しやすい特性をもつこと、そしてワムシが海産魚種苗生産の有用な初期餌料として世界的に汎用され、その培養技術開発に必要な基礎・応用研究が行われてきた背景が挙げられる。その他、寿命が短く世代を超えた研究が実施しやすいから、環境汚染を生物学的に評価する際の有用な生物材料としての応用が行われている。同様の理由で、水界生態系の構成員である動物プランクトンの種分化・進化、個体群の老化機構を解明していく上でも、有用な実験動物として認識されている。ここでは餌料生物としてのワムシにとって重要な形質であるサイズと増殖に着目し、これらの人為的制御についての有効な方策についての最近の研究例について述べる。